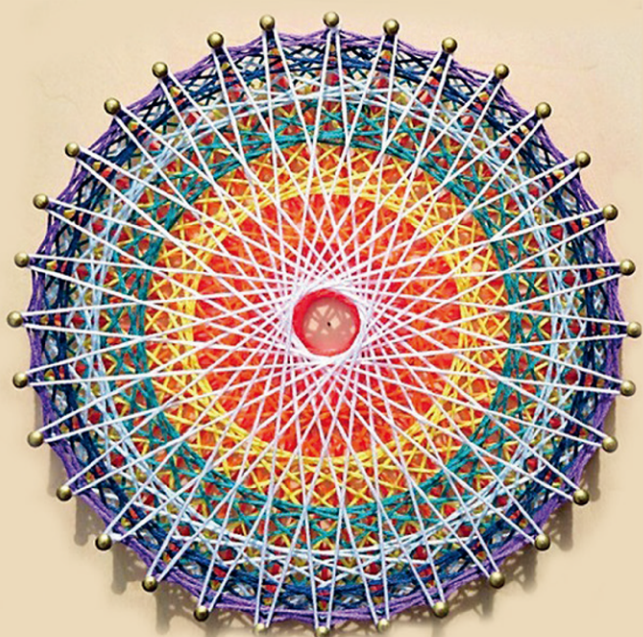


Yoko Tawada

Paul Celan
und der
chinesische
Engel

Roman

Konkursbuch
Verlag Claudia Gehrke



翻訳から 〈世界文学〉の創造へ

——生誕100年パウル・ツェランを手がかりにして

ゲスト 多和田葉子

齊藤毅 堀内正規 管啓次郎 関口裕昭

日時：2020年10月24日(土) 15:00 ~ 18:45(予定) オンライン(zoom)で開催

参加無料。参加をご希望の方は、右のQRコードよりお申し込みください。

定員に達し次第、受付を終了します。



主催：明治大学情報コミュニケーション学部 関口研究室 後援：明治大学 国際連携事務室

翻訳から 〈世界文学〉の創造へ

—生誕100年パウル・ツェランを手がかりにして



日時：2020年10月24日(土) 15:00～18:45(予定) オンライン(zoom)で開催

第1部 パウル・ツェランと世界文学の翻訳 (15:00～16:50)

開会のあいさつと導入 関口裕昭(明治大学)

- 1) ロシア文学 オーシプ・マンデリシターム 齊藤毅(ロシア文学者)のお話+司会者との対談
- 2) アメリカ文学 エミリー・ディキンソン 堀内正規(早稲田大学)のお話+司会者との対談
- 3) フランス文学 アンリ・ミショー 管啓次郎(明治大学)のお話+司会者との対談

*第1部は、それぞれの言語の専門の外国文学者が、ツェランが翻訳した詩人の〈世界文学〉における今日的意義やツェランとの関わりを話した後、ツェランが翻訳した1編の詩について、司会者の関口と集中的に検討します。扱う詩は、マンデリシターム：*Бессоница. Гомер* (「不眠。ホメロス」)、ディキンソン：*Four Trees upon a solitary Acre* (「四本の木が、孤独な土地の上に」)、ミショー：*Contre!* (「反対!」)の予定です。

第2部 多和田葉子氏による朗読と公演 (17:00～17:45)

新作小説 *Paul Celan und der chinesische Engel* (2020) について

第3部 全体の討論・質疑応答 (17:50～18:45)

ゲスト：多和田葉子

1960年東京生まれ。小説家、詩人、劇作家。早稲田大学文学部露西亜文学科を卒業後、渡独し、今日まで日本語とドイツ語の両方で創作活動を続ける。「かかとをなくして」(1991)で群像新人賞を、1993年「犬婿入り」で芥川賞を受賞した。以後、谷崎賞、泉鏡花賞、野間文芸賞、読売文学賞など日本の主要な文学賞を受賞するだけでなく、ドイツでも高く評価され、クライスト賞、シャミッソー賞などを受けている。2018年には『献灯使』で全米著書賞を受賞し、世界的な名声を確立した。現在、ベルリン在住。パウル・ツェランについてのエッセイを数多く発表しており、今年初めてツェラン小説 *Paul Celan und der chinesische Engel* をドイツ語で発表した。

齊藤毅 大妻女子大他、非常勤講師。ロシア文学・文化。共著に『他者のトポロジ—人文諸学と他者論の現在』、翻訳にマンデリシターム『言葉と文化』他。

堀内正規 早稲田大学文学学術院教授。アメリカ文学。著書に『エマソン 自己から他者へ』、『生きづらいこの世界で、アメリカ文学を読もう』など。

管啓次郎 明治大学理工学部教授。比較文学。著書に『斜線の旅』(読売文学賞)、詩集に『犬探し／犬のパピルス』など。

関口裕昭 明治大学情報コミュニケーション学部教授。ドイツ文学・比較文学。著書に『評伝 パウル・ツェラン』、『翼ある夜 ツェランとキーファー』など。

パウル・ツェラン (Paul Celan 1920～1970) ユダヤ系ドイツ語詩人。チェルノヴィッツ(現在ウクライナのチェルニフツィ)のユダヤ人家庭に生まれる。両親や友人の多くを強制収容所に失う中、奇跡的に生き延び、ブカレスト、ウィーンを経て、パリに移住。死者たちの沈黙の声を凝縮された詩的言語に結晶させた。代表作「死のフーガ」は20世紀に書かれたもっとも有名な詩とされる。パリのエコール・ノルマルでドイツ語講師を務めながら、英仏露など7か国語をこなす語学力を駆使して、多くのすぐれた翻訳詩も残した。1960年、「ゴル事件」と呼ばれる根も葉もない疑惑にさらされ、晩年は入退院の繰り返しを余儀なくされた。1970年セーヌ川に投身自殺。

参加無料。参加をご希望の方は、右のQRコードより申し込みください。

定員に達し次第、受付を終了します。

問い合わせ先：関口裕昭 zeitlose@meiji.ac.jp



主催：明治大学情報コミュニケーション学部 関口研究室 後援：明治大学 国際連携事務室